

福音の園だより

平成十八年度「高齢者雇用優良事業所 協会会長賞」受賞

TBSラジオ『MY!のきくわちゃん』取材紹介

グループホーム・デイサービス介護保険事業者指定

350・0016 埼玉県川越市木野目一八七八番地一

特定非営利活動法人 **福音の園・埼玉 事務局**

☎049・230・1111 (FAX230・1112)

福音の園 (Gospelarden) は、有限会社シヤロンの商標

ご家族の声

やっと我が家に帰れ、嬉しかった

前略。日のたつのは早いものです。

姉が大腿骨折して病院に入院し、退院してから一年たちました。手術の経過は良好でしたが、食事を自分から余り摂れなくなり、気力も低下した様子で、言葉も少なく心配しました。また熱も上がったたり、下がったり安定しませんでした。

主治医から、自分であまり食事が摂れない様なので「胃ろう」の手術をした方が良くと思うとのことがあり、姉と私はビックリし悩みました。体に穴をあけ、人工的に食事を摂るということは、食事の楽しさ、美味しさ等はなく、ただ／＼生かす為だけの食事になる様な気がして、納得がゆかず、ホーム長に御相談したところ、ホームの方で皆んなで「ケア」をするのですぐに退院させた方が良くという力強い助言をいただきました。安心して主治医に「胃ろうの手術はしない」と、何があっても病院には御迷惑はかけないことをお話しし、直ぐに退院の手続きを取り、退院させて頂きました。

た。ホーム長さんが車椅子持参で迎えに来て下さり、帰ることができました。ホームへ着いたら、スタッフの皆さんが「お帰りなさい」と笑顔で迎えて下さいました。

入院して二ヶ月余り、あれよく／＼という間に別人の様に、歯はお歯黒の様になり、無気力になり、口も聞けなくなっていました。退院してホームに着いてすぐ、大好きなお風呂に入れて下さり、歯も磨いて下さって、ピカピカになり、お風呂から出た姉はとても気持ちよかったです。スツキリと明るい笑顔になっていました。あまりの変わり様に私達はビックリ。介護の仕方でも表情が変わるものなのかと本当に有り難く姉と涙してしまいました。やっとわが家に帰れたこと、皆さんが笑顔で迎えて下さったこと、本当に姉は嬉しかったと思います。



早速、食堂脇にベッドを移して下さい、二十四時間見守り下さいました。そのお蔭でみるみる元気を取り戻すことが出来ました。姉はこの福音の園に御縁をいただき、あらためて本当に良かったと深く感謝致しております。(中略)。お伺いする度に素適な笑顔を見せてくれます。姉も私も安心しております。これからも色々とお世話になりますが、どうぞ／＼宜しくお願い申し上げます。(K・K)

基本理念・運営方針説明

お一人ひとりの生活への価値を目標として

グループホーム福音の園・川越 ホーム長 杉澤卓巳
高齢者の終末期における胃ろうなどの人工的分・栄養補給は、延命が期待できても、本人の生き方や価値観に沿わない場合は控えたり、中止したり

できるとする医療・介護従事者向けの指針案が昨年十二月四日、東京大学(東京・文京区)で開催された日本老年医学会のシンポジウムで発表されました。昨年一年間に五名が死去退居されました。内、三名を終末期看取りで御見送りしました。その中には「胃ろう造設」後もミキサー食・水分補給を最期まで口から摂取されながら二年十ヶ月生活された方もおられました。前述の「医療・介護事業者向け指針案」の通りに、私たちは介護保険の基本理念である「利用者(家族) 本位」を大原則に、当園基本方針の一つである「画一的な支援の押し付けにならないように、お一人ひとりの生活づくり

のパートナーを目指します」の下で お世話させて頂いていただいております。

お便り紹介

お便りを感じたいします。(中略)。



福音の園にやってきた由緒あるピアノはとてもデリケートな様子ですね。いつか拝見させていただけたら嬉しいです。福音の園には素晴らしい方々と、素敵なお品がひきつけられるようにやってくるように思います。愛にあふれた場所だからですね。(K・N)

御礼

ジャガイモ・玉ねぎ・澱粉 富樫農園様(北海道)
クリスマス会 ジーン加藤、他様(野田市)

新年おめでとう申し上げます

迎えました2012年も、確かな援助技術に基づいた「優しさ」と、福音に基づいた「希望」をお届けできるように専心してまいります。福音の園・川越 職員一同

母を天に送って

mommy「福音の園」での卒業式

去る九月三日夕、母が眠るように息を引き取り、天国に召されて行きました。五人の子供たちと私の家内が、それぞれの場所から駆け付け、母の枕元に立ちました。既に召された後でしたが、母の顔を見つめて私たちはホッと安心しました。穏やかで平安なその顔は私たちにとって何よりの慰めであり感謝なことでした。

家庭の事情で、認知症が始め高齢になった母を自宅で介護しながら共に生活する事に困難を覚えていた時、不思議にも「福音の園」に入居させて頂く道が開かれたのです。ホーム長さんと初めてお会いし、説明を伺いながら話が進んで行くうちに「この施設で母のこれからの生活をお任せしたい」との思いになり、偶然ではなく初めから計画されていたかのように「福音の園」での母の生活が始まりました。開設当初からの七年間近く、「福音の園」での生活を最後まで続けることができたのは、何よりも母本人がその生活の中で、無理なく、人間本来の生き方が出来たからではないかと思っています。それが、そのまま家族にとつても大きな安心となり、そこから家族とスタッフの方々との信頼関係が築かれたのではないかと思っています。ホーム長さんを中心に、スタッフの皆さんの介護、福祉に対して真摯に取り組み、向き合う姿勢が家族、周囲に伝わって来るように「母は此処に居るから大丈夫」という安心と信頼に繋がりました。

私自身、介護の分野に関心を持ちヘルパーの講習

を受け、短期間ながら特別養護老人ホームで実習した経験があります。限られた人数で多勢の入居者の介護をする現実の中で、どうしても介護する側の都合、立場が優先される流れになっており、それが当たり前前、普通の事として受け止められているようです。個人の人格、存在があまりにも尊重されていないのではと感じることが幾度もあり、心が痛む思いでした。勿論、介護に当たる方々は一生懸命自分の仕事をしているのですが、人間の頑張り、人間の知恵には限界があり、どうしても調和が失われ、一方通行の状況が表面化してしまいがちです。そこに神の知恵と神の愛が加わる時、今迄とは違う、人間本来の生き方、交わり、関係が生まれてくるように思います。私と家族は「福音の園」との関わりの中に、そのことを何時も感じ安心感を覚えておりました。

もう一つ感じたのは、「福音の園」の運営が実に多くの方々との関わりの中で支えられているということです。多くのボランティアの方々や地域の皆さんの参加、協力があつたり、企画があつたり、独自の園芸療法や斬新な取り組みであつたりと、それらが日常の中で自然な形で織り込まれていました。ただ平穏に人生の終末を過ごすということではなく、神様によって目的を持って生まれてきた一人ひとりがより人間らしく、より生き生きと生きる。生かされるという事、向き合っている様子を「福音の園」に見い出すことが出来ました。母が「福音の園」で最後の七年間近くを過ごしたことは家族にとってとても感謝なことでした。

人生の終わりの日々を平安で安心して過ごせることは何と幸いで大切なことでしょうか。

母が召された翌日、納棺し近くの教会に安置するために「福音の園」を出る時、入居者の方々、職員

の皆様が全員玄関で待つていて下さり、賛美歌を歌って送り出して下さいました。まるで「福音の園」を出て、新しいスタートをする卒業式のような様子でした。